

ちょっと気になるデータ解説

労働力需給のミスマッチ

雇用・失業の情勢は、失業率が2003年から低下傾向を示し、06年以降は4%前後の水準となり、また有効求人倍率も06年以降1倍を超えて推移するなど、「厳しさが残るものの、着実に改善している」(10月の月例経済報告)との判断が継続されている状況だ。しかし、求人と求職のミスマッチの問題は、全体の情勢が改善に向かう中でも、引き続き注視しなければならない問題である。

ミスマッチの要因について、総務省統計局の平成18年「労働力調査年報(詳細結果)」から現状を見よう。労働力調査年報(詳細結果)においては、求職者側からの要因として、平成18年平均の完全失業者の「仕事につけない理由」は、完全失業者総数275万人のうち、「希望する種類・内容の仕事がない」が86万人、「求人年齢と自分の年齢が合わない」が52万人にのぼった(表参照)。さらに年齢別に見ると、15～44歳層の各年齢階級では「希望する種類・内容の仕事がない」の理由が最も多く、主に若年層に仕事の種類・内容を重視する傾向が見られる。一方、45歳以上では「求人年齢と自分の年齢が合わない」が最多となり、年齢が主なミスマッチ要因となっている。この二つの要因に比べ数は少ないが、「勤務時間・休日などが希望とあわない」とした人が、25～34歳層のうち10万人(うち女性8万人)、35～44歳層(総数48万人)のうち7万人(うち女性6万人)おり、とくに子育て世代の女性にとって、労働時間が問題となっていることがうかがえる。

仕事につけない理由、年齢階級別完全失業者数

単位:万人

項目	完全失業者						
	総数	15-24歳	25-34歳	35-44歳	45-54歳	55-64歳	65歳以上
総数	275	50	77(32)	48(21)	40	49	11
賃金・給料が希望とあわない	21	4	7(2)	5(1)	3	2	0
勤務時間・休日などが希望とあわない	26	4	10(8)	7(6)	3	2	0
求人年齢と自分の年齢が合わない	52	1	2(1)	6(3)	14	23	6
自分の技術や技能が求人要件に満たない	18	4	6(2)	4(1)	2	1	1
希望する種類・内容の仕事がない	86	23	31(11)	13(6)	9	9	1
条件にこだわらないが仕事がない	21	4	5(1)	3(1)	3	4	1
その他	49	10	16(7)	9(3)	7	7	1

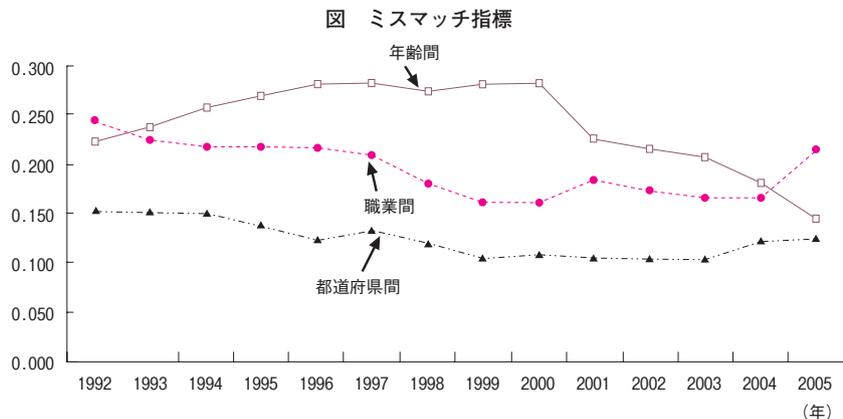
出所:総務省統計局「労働力調査(詳細結果)」平成18年平均
()内は女性の数。網掛け部分は各年齢階級で最も多い理由。

ミスマッチ問題は、年齢、職種、地域による労働力需給のばらつきによって生じる。ミスマッチの程度が大きくなると、構造的失業の要因が強まることになる。このミスマッチの状態を数値化したのが「ミスマッチ指標」であり、求人数全体に占める区分別(年齢、職業、地域)の求人数割合と求職者数全体に占める同じ区分別の求職者数割合の差の絶対値の合計を2で割って求めることができる。

$$\frac{1}{2} \sum \left| \frac{U_i}{U} - \frac{V_i}{V} \right|$$

U_i : 区分*i*の求職者数
 U : 求職者総数
 V_i : 区分*i*の求人数
 V : 求人総数

ただし、これによって得られたミスマッチ指標の水準を、区分ごとに相互に比較することはできない。年齢、職業、地域の各区分のミスマッチ指標の大きさが異なるためである。最近の傾向については、職業間および地域(都道府県)間が低下傾向にあったが、04年以降上昇している。これに対し、年齢間のミスマッチ指標は2000年まで上昇傾向にあったが、年齢不問求人の増加などもあり、その後減少に転じている(注)。



資料:「職業安定業務統計」

注:指標の区分によってミスマッチ指標の大きさが異なるため、各ミスマッチの水準を相互に比較することはできない。

(調査・解析部 主任調査員 吉田和央)

(注) 本欄で取り上げたミスマッチ指標については、当機構「ユースフル労働統計 労働統計加工指標集2007」91～93頁で解説している。その他、就職率と充足率については、本誌掲載論文「公的職業紹介のマッチング効率—就職率と充足率による検討」で詳しく取り上げており、また、JILPT資料シリーズNo.35「業務統計を活用した新規指標2007」でも、データ分析を掲載している。